

北海道童謡史

柴村紀代

Abstract

There is a clear distinction between the nursery rhymes appearing in the 1920s and the songs traditionally sung among the people (known as *warabeuta*), and “original nursery rhymes” appeared in the children’s magazine “*Akaitori*” (The Red Bird) that was published in July, 1918. The editor of the contributors’ column for nursery rhymes was Hakushu Kitahara, and the songs chosen were “artistic songs written with simple lyrics based on the climate and traditions of Japan,” and they spread throughout Japan from the 1920s. Even in Hokkaido, those influenced by “The Red Bird” published one nursery rhyme after another, and Hokkaido’s first book of nursery rhymes, “*Ari no O-Shiro*” (The Ants’ Castle) was published in 1928 by Chinmoku Hasebe. This study follows the footsteps of the Hokkaido poets who composed those nursery rhymes, and provides a summary of their achievements.

1. 童謡の起源

「童謡」ということばはいつから使われだしたのか。「わらべ唄」とどう違うのか。その疑問に対し、与田準一は『日本童謡ものがたり』¹⁾の「解説」で次のように述べている。

一日本の童謡は、祖先からうたいつたえられてきた「わらべうた」と大正時代のなかばごろから、白秋先生や、そのほかのたくさん詩人たちの手で、あたらしくかかれ、つくられてきた「創作童謡」との二つにわけることができます。

『日本童謡事典』²⁾では、
—『古事記』『日本書紀』のなかに〈童謡〉〈業謡・
技謡〉の名でわらべ唄と見てよい唄が記録されており、平安時代には『梁塵秘抄』がいくつものわらべ唄を正確に書き止めている。

とある。江戸時代に入って、近世のわらべ唄を系統的に集成したものとして行智編の『童謡集』(1820年)があり、行智は童謡を子守歌、鬼わたし、羽根突き唄、まりうた、遊戯唄などに分類していた。明治の教育者はわらべ唄を始め伝統音楽のすべてを卑俗なものとして廃し、唱歌を教育の中心においた。藤田圭雄は、これを「唱歌は西洋音楽のリズムや音階に親しませる点で効果があったが、歌詞は文語体の古風なもので、新時代を象

徴する進歩的なものではなかった³⁾と述べている。

「童謡」ということばが、現在使われているような「子どものために創作された唄」として用いられるようになったのは、1918(大7)年、鈴木三重吉によって創刊された児童雑誌「赤い鳥」⁴⁾からである。

この創刊号には〈創作童謡〉として北原白秋の「りすりす小栗鼠」「雉子ぐるま」と泉鏡花の「あの紫は」が載っている。その他に北原白秋選として〈各地童謡〉が11編入っている。この中には、北原白秋の童謡「赤い鳥」⁵⁾の元歌となった北海道河西郡の子守歌「ねんねの寝た間に」⁶⁾も入っていた。すでにこの頃から、童謡は「創作童謡」と「伝承童謡」に分けられ、北原白秋は「赤い鳥」を拠点に多くの「創作童謡」を発表すると共に、各地の「伝承童謡」収集にも力を尽くした。

2. 北原白秋

2-1 北原白秋の童謡

北原白秋(1885(明18)～1942(昭17))は福岡県に生まれ、北原家は代々柳河藩御用達の海産物問屋だった。早稲田大学高等予科文科に入学するが翌年退学。1906(明39)年、与謝野鉄幹・晶

子の主宰する「新詩社」に入り、「明星」に詩を発表。2年後に新詩社を退会。1909（明42）年小田原に移住し、1918（大7）年7月創刊の「赤い鳥」の童謡欄の選者を引き受ける。小田原から1926（大15）年東京へ転居。童謡集『とんぼの眼玉』（アルス 1919年）を皮切りに『月と胡桃』（梓書房 1929年）など次々に刊行。伝承童謡の収集にも力を注ぎ、死後『日本伝承童謡集成』全6集（三省堂 1974～76年）が弟子たちの手で完成した。

白秋は「新しい日本の童謡は根本を在来の日本の童謡に置く。日本の風土、伝統、童心を忘れた小学唱歌との相違はここにあるのである」⁷⁾と述べ、「赤い鳥」が良質な児童雑誌として全国に購読者を増やす中で、「赤い鳥童謡」と呼ばれる今日の童謡の礎を築いた。

2-2 北原白秋と北海道・樺太旅行

1924（大13）年、白秋は鉄道省の主催による樺太観光団に入って二週間の北海道、樺太旅行を行った。8月7日に横浜を出航し小樽へ船で渡り、樺太へ向かった。樺太では国境の安別に上陸し、その後真岡、多蘭泊と南下し、海豹島を見物して帰途に着いた。この間の見聞録は、後に『フレップ・トリップ』⁸⁾（アルス 1928年）にまとめられた。文体はリズムカルな冗舌体、旅ではずむ気持ちをそのまま写したような文体である。この旅で見聞したことは童謡にも反映され、「赤い鳥」等に発表され、その後童謡集『月と胡桃』詩集『海豹と雲』に収録された。それらのいくつかを見ておきたい。

安別

海は韃靼、／夏の暮、／犬よ、のそりと、／出て見ぬか。／／鱧乾場の葱坊主、／鴉つついて、／啼かないか。／／ここはお国の／北のはて、／赤い夕日も／もう寒い。（「赤い鳥」大正15年2月）
（※／は改行、／／は連の終わり、以下同じ）

敷香

北から北から泣いて来た／ろしあの子供はかはいさう。／子供をつれつれ逃げてきた／ろしあの子供はかはいさう。／やっとな匹ついて来た／ろしあの子供はかはいさう。／／（2連目略）土人はオロチョン、ギリヤアク、／お魚ばかり干してるし。（「赤い鳥」大正15年2月）

イワンのお家

イワンのお家は／丸太小舎、／丸太小舎、／時計

がコチコチ、／燈があかい。／／イワンの母さん、／木の鉢で、／木の鉢で、／麦っ粉こねこね、／うたひます。／／『冬が来た来た、／かはいいいイワン、／かはいいいイワン、／ペチカ燃そかよ、黒ばん焼こか。／／おいで、牝牛よ、スープも煮えた、スープも煮えた、／櫛よ、吹雪よ、／ちりからこ。』（「赤い鳥」大正14年11月）

樺太の春

をどれ、馴鹿、／角のえだ、／オロチョン、オロチョン、／出ておいで。／／（以下略）（「赤い鳥」昭和2年3月）

童謡を読む限り、ほほえましく温かいものを感じるが、実際はどうであったか。樺太旅行の途中、一行は豊原近辺のロシア人イワン・クリロフの家へずかずかと入り込む。イワンの許可も得ぬまま、17、18歳の娘の部屋にも、ベッドで竦んでいる老婆の部屋にも入って行った。仕方なく笑っているイワンのことを「何と素直で善良なロスキー気質であろう。おおまか如何にも寛々とした無智」と『フレップ・トリップ』にそのときの様子が書かれている。

サボウ

こつりこつりと、木のおくつ／のみでほってる、足のあな。／（2連目略）こつりこつりと日はながい、／春も毛ごろも、トラピスト。／（3連目略）こつりこつりと、ほら、あるく、／白い樺の木サボウ。（「赤い鳥」昭和2年5月）

白秋は、稚内で観光団と別れ、旭川・札幌・函館をへて当別のトラピスト修道院を訪れている。これは1896（明29）年に創設された男子修道院で、数年前に三木露風もここに滞在したことは後に述べる。白秋はこの修道院が印象深かったようで、他にも「修道院の裏庭」（「婦人の友」昭和2年9月）等の童謡を残している。

この道

この道はいつか来た道、／ああ、そうだよ、／あかしやの花が咲いている。／／あの丘はいつか見た丘、／ああ、そうだよ／ほら、白い時計台だよ。／／（以下略）（「赤い鳥」大正15年8月）

これも旅行中に立ち寄った札幌での作である。

2-3 白秋の「アイヌの子」について

アイヌの子

大豆畠の／露草は、／露にぬれぬれ、かはいいな。／／大豆畠の／ほそ道を、／小さいアイヌ

の／子がひとり。／／いろはにほへと／ちりぬるを、唐黍たべたべ、おぼえてく。「赤い鳥」大正14年12月)

この旅行中、一行はたえずアイヌを見ることを楽しみにしていた。ようやく多蘭泊^{オムランボ}でアイヌ部落を見ることになり、一行の一人は、「アイヌにも芸妓はんがありまへよか」と聞いたりしている。この時は汽車で部落の横を通るだけだったようで、そのためかえて率直な人々の感想が述べられている。「や、アイヌの家だ」「出ている、出ている」ともの珍しげに叫び、白秋はアイヌの人々が日本の浴衣を着ているののがっかりし、「乞食同様の風俗」と衣類や住居の貧しさをあげていた。この時のアイヌの子をどこで見たかは定かではないが、とうきびをかじりながら「いろはにほへと」を口ずさんでいるのがほほえましく写ったにちがいない。しかし、ここには当時の日本人のアイヌ民族への優越感がそのまま表れているように思われる。

明治以来、時の政府によってアイヌ民族への同化政策が押し進められて行った。1899(明32)年、北海道旧土人保護法が制定され、1901(明34)年には、旧土人教育規程が設けられた。最初の小学校が沙流郡平取に設置されて以後、日本政府の方針はアイヌ民族固有の文化・伝統を保護するのではなく、日本人への同化、皇民化政策を押しすすめていった。ここには自分たちよりも一段低いとみなすアイヌ民族が、懸命に日本語を覚えようとしているとする優越感からの寛容がみてとれる。和人の子どもがとうきびをかじりながら「いろはにほへと」を暗唱しても、おそらく白秋は作品にしなかったろう。アイヌの子が、ほほえましくも懸命に日本語を覚えようとしている風景だからこそ、白秋は作品化したのだ。

1925(大14)年「赤い鳥」に載せられたこの歌が、その後自選抄にもとられ、『北海道児童文学全集』にも収録されている。当時の同化政策がどのように民衆に無自覚に受け入れられていたかの一つの証として、記憶にとどめておきたい作品である。

3. 三木露風

3-1 白露時代とトラピスト修道院講師

三木露風(1889(明22)–1964(昭39))は兵庫県竜野市に生まれる。母かたは露風7歳のとき離

婚。13歳の頃から「少国民」等に投稿し早くから文才を認められる。1905(明38)年詩歌集「夏姫」を自費出版。8月上京し、有本芳水の下宿に同居。北原白秋、若山牧水らと出会う。1907(明40)年、相馬御風、野口雨情らと早稲田詩社を結成。1909(明42)年9月、第2詩集「廃園」を刊行。同年3月刊行された白秋の詩集「邪宗門」と並び称され、象徴詩の代表格として「白露時代」と呼ばれた。1915(大4)年、上磯町トラピスト修道院を初めて訪問、3週間滞在する。1918(大7)年鈴木三重吉から「赤い鳥」の童謡の選者の依頼を受けるが、弟の看病のため白秋を推薦する。「赤い鳥」8月号に童謡「毛虫採」を載せる。1920(大9)年5月、夫婦で来道し、トラピスト修道院講師として着任。以後、1924(大13)年6月、トラピストを去るまで4年余りを過ごし、この間、夫婦で受洗する。1921(大10)年5月児童教育雑誌「榎の実」(研秀社)に童謡を寄稿。以後毎月同誌に童謡を発表。8月「赤蜻蛉」を同誌に発表。12月、第一童謡集『真珠島』(アルス 1921年)刊。以後、第二童謡集『お月さま』(アルス 1926年)、同年第三童謡集『小鳥の友』(新潮社)の3冊の童謡集を出し、未発表の童謡集4冊が『三木露風全集』第3巻に載せられている⁹⁾。昭和に入ってから露風は、『現代詩人全集』(新潮社 1929年)や『現代日本詩人全集』(創元社 1955年)等に今までの詩が収録されることが多く、新しい活動は少なかった。1964(昭39)年、郵便局に行く途中、タクシーではねられ事故死する。享年75歳であった。

3-2 「赤とんぼ」誕生の背景

三木露風の代表作「赤とんぼ」は、1920(大9)年秋のある日、トラピスト修道院の窓の外をふと見ると、赤とんぼが竿の先にじっととまっているのを見て作った。と露風自身が記している¹⁰⁾。この作が、「榎の実」に載ったのが1921(大10)年8月号で、現在歌われている歌詞とは少し違っている。

赤とんぼ

夕焼け、小焼けの、／山の空、／負はれて見たのは、／まぼろしか。／／山の畑の、／桑の実を、／小籠に摘んだは、／いつの日か。／／十五で、ねえやは／嫁に行き、／お里のたよりも／絶えはてた。／／夕焼け、小焼けの、／赤とんぼ、／と

まってるよ、／竿の先。／／
これが『真珠島』に収録されたときは、
夕焼け、小焼けの／赤とんぼ／負はれて見たの
は／いつの日か。／／山の畑の／桑の実を／小
籠に摘んだは／まぼろしか。／／十五で姐や
は／嫁に行き／お里のたよりも／絶えはて
た。／／夕焼け、小焼けの／赤とんぼ／とまっ
てるよ／竿の先。／／

と現在の歌詞に落ち着いている。なお、その後「負はれていたのは」母の背かねえやか、「お里のたより」が「便り」か「頼り」かの論争もあったようだが、和田典子の調査で、「姐やが嫁に行つて母代りのねえやの「便り」と「頼り」のかけことばだ」と紹介している¹¹⁾。又、この「赤とんぼ」は戦後、小学6年生の「音楽」の教科書に採用されたが、第三節の「十五で姐やは／嫁に行き」が、結婚年齢以前ということでこの連が削除されたという。比良信治は「三木露風とトラピスト修道院一童謡「赤とんぼ」誕生をめぐって」¹²⁾で、実際に音楽教科書を調べ、教育芸術社発行の昭和32年版、46年版は削除。東京書籍発行の昭和31年版は削除だが、46年版には第3節が掲載されていることが確認されている。

なお、三木露風が北海道の詩人たちに与えた影響については、露風を慕って、修道院近くの茂辺地小学校に転任した支部沈黙^{はせむべ}の章で詳しく述べた。

4. 野口雨情

4-1 野口雨情の童謡

野口雨情(1882(明15)–1945(昭20))は、茨城県北茨城市の回漕業野口家の長男英吉として生まれる。19歳で東京専門学校(現・早稲田大学)高等予科に入学し、坪内逍遙の講義を聴く。同級に小川未明がいた。翌年中退。1904(明37)年父死去のため帰郷。1907(明40)年小川未明の家に寄留。未明の紹介で相馬御風・三木露風などと早稲田詩社の結成に参加。5月、札幌の「北鳴新聞」記者、9月、石川啄木と知りあい、「小樽日報」の創刊に参加する。1909(明42)年11月、旭川の北海旭新聞勤務を最後に北海道を去る。1911(明44)年8月～9月、皇太子の北海道巡幸の記者団の一員として随行。10月、帰郷し家業の山林業や農業に従事。1920(大9)年上京し雑誌「金の船」社

主齊藤佐二郎の依頼をうけ、「金の船」「金の星」¹³⁾童謡欄選者となる。1921(大10)年、第一童謡集『十五夜お月さん』(尚文堂)刊行。1923(大12)年、評論集「童謡十講」(金の星出版部)を刊行。以後、多くの評論集を出した。1924(大13)年、第二童謡集『青い眼の人形』(金の星社)。この頃、童謡を歌う音楽会が流行し、雨情は作曲家本居長世とのコンビの童謡が多く、本居長世の三人の娘が少女歌手としてデビューしており、「十五夜お月さん」もレコード化され広く知られるようになった。1926(大15)年第三童謡集『蛍の燈台』(新潮社)を刊行。ここには「コドモノクニ」や「少年倶楽部」に発表した童謡が多く収録され、作曲家中山晋平とのコンビも多い。第四童謡集『朝おき雀』(鶴書房)を1943(昭18)年刊行。最後の童謡集となった。

雨情は、「金の船」「金の星」の選者として「童謡論」を誌上にも、又評論集としても論じてきたが、同時に「金の船」「金の星」の講演会にも気軽に参加し、「童謡のおじさん」と呼ばれ親しまれた。

4-2 野口雨情の童謡論

雨情は、第二童謡集『青い眼の人形』で次のように述べている。

—童謡は童心性を基調として、真、善、美の上にたつてゐる芸術であります。童謡の本質は知識の芸術ではありません。童謡が直に児童と握手の出来るのも知識の芸術でないからであります。童謡が児童の生活に一致し、真、善、美の上に立つ情操陶冶の教育と一致するのも超知識的であるからであります。

大正時代は、「童心主義」と呼ばれる子ども観が主流で、鈴木三重吉や北原白秋もこれに依拠している。雨情は基本的には童心主義を踏まえているが、その上により純粋に「子どもの心に映ったそのままの感情」を重視し、大人が知識で創るものを否定している。又、童謡が情操教育の一環としての役割を果たすことにも踏み込んでいった。

「童謡十講」で雨情は、より具体的に童謡の表現面に触れて、「子供にも大人にも分かるもの」「口語で書かれたもの」「唱うことの出来るもの、同時に踊ることの出来るもの」「子供の生活を土台としたもの」など八項目を挙げている。雨情の童謡が人々に長く愛されてきた背景には、このような雨

情の童謡観が反映していると言える。野口雨情の童謡論については、畑中圭一『童謡論の系譜』¹⁴⁾により詳しく論述されている。

4-3 童謡「赤い靴」成立の背景

雨情の童謡には、「十五夜お月さん」や「七つの子」など日本の風土や情緒をうたったものや下記の「蜀黍畑」に代表される「郷土童謡」や「兎のダンス」「黄金虫」のような楽しい歌も多い。

蜀黍畑
お背戸の 親なし／はね釣瓶／海山 千里
に／風が吹く／蜀黍畑も／日が暮れた／鶏
さがしに／往かないか

その中で「赤い靴」は、1921(大10)年12月号の「小学女性」に載った歌だが、この童謡には実際のモデルが居て、その成立の背景を調べたのが北海道テレビ局の放送記者菊地寛である。北海道テレビは、1978(昭53)年、「赤い靴」を素材にドキュメンタリー番組を作り放映した。その後、それらの経緯を書いた『赤い靴はいた女の子』¹⁵⁾が出版されている。

雨情は、1907(明40)年北海道に渡り、札幌の『北鳴新聞』の記者になるが、この時、札幌山鼻の一軒家に共同で住んだのが、鈴木志郎夫妻であった。鈴木志郎の妻かよは、志郎と結婚する前、故郷の静岡県安部郡不二見町(現清水町)で私生児きみを1902(明35)年に出産している。かよは志郎と結婚するにあたって、おじ安吉の勧めで、当時札幌で布教活動をしていたメソジスト教会の宣教師ヒュエット夫妻にきみを養子として手放した。この話を聞いた雨情が、童謡「赤い靴」を1921(大10)年発表し、本居長世の曲が付き広く歌われるようになった。1979(昭54)年には横浜の山下公園に「赤い靴」の少女像が建つなど、幼くして異国にもらわれていった少女の物語は日本人の心に甘く訴えるものがあつた。しかし、前述の菊池寛の調査で、きみはアメリカに渡る前に結核にかかり、1911(明44)年9月、東京の鳥居坂教会の孤児院で亡くなり教会の墓地に埋葬されていたことが判明した。

5. 吉田一穂

吉田一穂(1898(明31)－1973(昭48))は、北海道上磯郡木古内町の網元の家に生まれた。一穂

は7歳で古平に移住、15歳で上京し以後74歳で亡くなるまで再び古平に住むことはなかったが、古平を「白鳥古丹」と呼んでなつかしんだという。一穂は生前『海の人形』(金星堂 1924年)など3冊の童話集を出し、童謡も多く発表している。

全集の年譜によれば、一穂は1921(大10)年から実業之日本社との交流が始まり、同社の「日本少年」「小学女生」に童謡・童話を発表し始め、大正年間の一穂の原稿生活は、その大部分が「小学女生」「少学男生」両誌休刊後は「幼年の友」によって支えられていたという。一穂の童謡の最初の雑誌発表は1921(大10)年5月号の「日本少年」に載った「ふる郷へ」である。

ふる郷へ

ふるさとを／たずねて見れど／山悲し／父を
亡くした／燕ゆゑ／森の梟の目が恐い。／ふ
るさとへ／たづねて来たが／どうしよう。／
母を亡くした／燕ゆゑ／古巣さがせど跡もな
く。／／しよぼしよぼ降るは／五月雨の／軒に
さびしい音ばかり。／／

一穂の研究者吉田美和子¹⁶⁾によれば、一穂の童謡は「親なしとお背戸と日暮れ」をうたう感傷的抒情詩の城を出なかつた」とあるが、与田準一の『日本童謡集』¹⁷⁾にも、一穂の童謡は「かりがね」と「山かなし」の二編だけである。

かりがね

おちる木の実の夜をこめて／納戸で虫がなきあ
かす。／／わたる野分にさらさらと／月さす背
戸のすすき原。／／がながんがんと、かりがねさ
ん／わたる月夜の／かりがねさん。／／水瓜ぬ
すつとみつけたら／がながんがんと、鐘ならせ。

このうち、「山かなし」は1926(大15)年7月の『日本童謡集』に収録されている。この『日本童謡集』は、1925(大14)年に結成された童謡詩人会の出した年間詞華集であり、「大正期に童謡を書いている人々のほとんどすべてを網羅した大正期童謡総決算の書」であった。同会に吉田一穂は1926(大15)年に入会している。

吉田一穂は早くから北原白秋に傾倒していた。年譜(『吉田一穂大系』別巻)によれば「大正3(1914)年末、北原白秋の歌集『桐の花』を携えて津軽海峡を渡る」とある。その後も1932(昭7)年に『白秋詩抄』『白秋抒情詩抄』の編集をしたりしているが、1946(昭21)年『北原白秋詩集』(鎌倉書房)では、巻末に「白秋について」を発表。

「平面的に拡散していく白秋の作品と、求心的垂直的な自身の立場とはなにかも異質であることを確認」（『定本吉田一穂全集別巻』）とある。

大正期の吉田一穂の童謡は、吉田美和子のいうように「親なしとお背戸と日暮れ」をうたう感傷的抒情詩の域を出なかったというのうなづけるが、戦後の一穂の童謡をも、一口にくくってしまっていていいものかという疑問が起きた。

1945（昭20）年から1950（昭25）年にかけて、吉田一穂は詩編「白鳥」と「古代緑地」の構想を基軸とした現極論の完成を目指し、1948（昭23）年に札幌の青磁社から詩集「未来者」を刊行、更科源藏を中心とする「至上律」に詩・詩論を発表するなど、旺盛な創作を続けていた。同年に再度「試論「白秋論」」を「望郷」に発表。「白秋を浪漫主義の一典型として位置づけ、その天性の感覚的資質には敬意を払いつつも、白秋を近代性を持たぬ抒情詩人として、自身とは明確に袂を分かつ」とある。

この一穂の抒情詩との訣別は、彼の童謡にもなんらかの影響を与えているのではないか。そのことを、戦後発表された童謡「あしたのうた」（「新児童文化」復刊第6集 1951（昭26）年7月）に見てみたい。

あしたのうた

しじふからがきた 麥もふんだ／もう糸車のおばあさんも ゐない／ゐろり火は いつもおなじに もえてゐる／ぱちぱち はぜながら なにか 話しかける／ほつかり 灰をかぶって おいもがやける／あぶらを すひあげ よふけの らんぷ／／水車は とまった 雪だ／音もなく ふるそらからの てがみ／あした なんとかいてあるのか 読まう／はだしの すずめたちの よあけの歌を／すみやき山から うまやの のきへ／とびつづたひの うさぎの あとを

この詩に「赤い鳥」からの脱皮を感じられないだろうか。少なくともこの詩には、お背戸や親なしや日暮れなど「赤い鳥」童謡の常套句を使い、安易な抒情に流れる従来の童謡にみられない健全さがある。「あしたのうた」というタイトルに向かって、静かな雪の夜、朝のすずめやうさぎたちを思い描く明るさがある。

このような一穂の童謡の転換は、他にも「むらさきりんだうは海のいろ」（初出「小學四年生」昭

和27年）の出だし「そらたかく けふも わたりどり、／どての すすきを かきわけて／くちぶえ ふけば くもがわく。」の第一連にも感じられる。

一穂が童謡詩人であったら、ここを転換点として新しい童謡の開拓が行われたに違いない。しかし、一穂は戦後、『未来者』（青磁社 1948年）『羅甸薔薇』（山雅堂 1950年）『古代緑地』（木曜堂 1957年）の詩集を次々と発表し、純粋詩を探求する象徴詩人として独自の地位を築いていった。そのために、童謡から新しい児童詩への転換は、結局不発に終わったとみるべきだろう。

全集に収録された戦後の童謡・児童詩は10編にすぎない。それも、「あしたのうた」を頂点として、例えば「おちば」（キングダー・ブック 昭和28年）の第三連「かさこそ あしおと、／どんぐりひろひ、／ほそみち つけて／だあれが とほる、／ころころ こほろぎ／なきやんだ」のように、安易な常套句による抒情的童謡へと逆戻りしている。

こう見てくると、やはり一穂を童謡詩人として見ることはできない。しかし、大正期の「かりがね」や「山かなし」だけを代表作として、「赤い鳥」の傍流とだけとらえるのには抵抗がある。「あしたのうた」に見る児童詩の可能性を今後に生かせるかもしれない児童詩人だったと位置づけたい。

6. 伊東音次郎

6-1 江別に生まれて

伊東音次郎（1894（明29）－1953（昭53））は札幌郡江別村に生まれる。父正美は鳥取県から江別屯田兵として入植、屯田兵村会の公有財産取扱委員を勤めた。音次郎は江別尋常高等小学校卒業後、札幌第一中学校（現札幌南高校）に入学するが、父の急死で中退する。翌年の1910（明43）年、ロシア語勉強のため上京、口語短歌の西出朝風と出会う。朝風の創立した「純正詩社」の同人となり、下記の代表作の他、この時期多くの口語短歌を残している。

函館は山にかくれる恋人よ 西の障子にほほあてて泣け

1916（大5）年の秋、江別に帰郷した音次郎は江別町役場や江別屯田兵村等に勤めるが、その後果樹や蔬菜作りに取り組む百姓歌人として過ごし

た。この間の現金収入を支えたのが童謡であった。音次郎は1923(大12)年から1927(昭2)年まで東京の雑誌に多くの童謡を発表している。

現存する音次郎の童謡は「小学少年」の1923(大12)年11月号に載った「かくれんぼ」(竹久夢二画)が最初である。これを皮切りに「小学少年」「小学少女」「子供新聞」などに54編の童謡を発表している。

「小学少年」「小学少女」とのつながりは江別の研究者新館長侍によれば、「かつて上京中に知り合った上田穆(ばく)の紹介で、「この年から“少年”“少女”“小学少年”“小学少女”という雑誌に童謡を発表し出した」¹⁸⁾とある。

「小学少年」「小学少女」は1919(大8)年5月から1928(昭3)年3月まで研究社から出された児童雑誌で、色絵、グラビア写真を豊富に使い初山滋や竹久夢二の絵が巻頭を飾っていた。童謡では三木露風、西条八十、童話では吉屋信子、与謝野晶子、小川未明らが同期で活躍したとある。これらに互して音次郎の童謡が巻頭を飾っていることから見て、伊東音次郎の童謡が当時の誌上で十分に評価されていたことがわかる。その他、江別の研究者望月芳明¹⁹⁾によれば「当時童画家として著名な武井武雄、初山滋がこぞって絵を添え、また奥田貞、大和田愛羅らの作曲によって、そのころ自由教育を提唱する進歩的な教師によって学校で唱われていた」という。

しかし、音次郎の童謡の発表誌は狭く「小学少年」「小学少女」が1928(昭3)年に廃刊されると急速にその発表の場を失った。もし彼が東京の地にあれば、両誌廃刊の後もしずれかの雑誌に発表の機会もあったかと思うが、今よりもずっと遠い北海道の地にいたことが彼の童謡発表の機会を費えさったと見ることができよう。

なお、1923(大12)年11月号の「小学少年」の巻頭を飾った童謡の挿絵は竹久夢二の手によるものだが、音次郎と夢二とは上京中に親交があったらしく竹久夢二から音次郎宛の書簡が残っている。

竹久夢二との親しいつきあいが「小学少年」でいきなり夢二の絵で巻頭グラビアを飾ることにつながったのかもしれない。

かくれんぼ

雨のふる日のかくれんぼ／二人ひっそりかくれんぼ／鳥屋にかくれて、かくれんぼ。／／鬼はをかしや、雨の中、／ぐっしょりぬれてきよときよ

とと。／朴の下からきよときよとと。／／雨のふる日のかくれんぼ／／鳥屋にかくれて、かくれんぼ。／雨のやむまでかくれんぼ(「小学少年」大正12年11月)

薬屋さん

薬屋さん／はいはいだはんの／薬屋さん／ひねり膏／だはんのお薬／一つ一銭／幾何だえ／まけませう／／越中富山の／泣く児によくきく／薬屋さん／げん膏は／泣く児のお薬／五銭に三枚／幾何だえ／まけませう

いずれも「小学少年」「小学少女」の注文が途絶えた後、「道民」という雑誌に1931(昭6)年7月に載せた作品である。どこか肩の力を抜いて、子どもらに楽しい話を聞かせるように作られた感がある。同じ号に載せられた「ジョーカー」も不思議な擬音の効果とともに味わいのある作品だ。

ジョーカー

ピンカラコ／ポンカラコ／ピンカラコ／ピンカラコ／ポンカラコ／ピンカラコ／一人のこった／房のお帽子／赤いお顔で／ジョーカーさん／はね上げて／おじぎして／手足ふるわせ／頭で受けて／幕がしまって／ピンカラコ／ポンカラコ／ピンカラコ

伊東音次郎にもう少し童謡発表の機会が与えられれば、この擬音やリズムの工夫がやがて独自の形を作ってきたかもしれない。また彼にもう少し野心と童謡への情熱があれば、既成の童謡の枠を突き破って新たな作風が生まれたかもしれない。残された五十数編の童謡からは残念ながら、後世に残ると言える作品は生まれなかったが、その端正な作品と明るさにやはり伊東音次郎の人柄を見る思いがした。

7. 坪松一郎

坪松一郎(1910(明43)－1969(昭44))は茨城県生まれだが、父唯三郎が江別で坪松窯業を開始、1936(昭11)年から1946(昭21)年まで江別町長を務めるなど江別に根を下ろしたため、江別に移住、北海中学に通う。江別で坪松は小田邦雄と出会い、宮沢賢治を語り合う。1932(昭7)年、北海中学を卒業後、新篠津村の小学校代用教員となる。同年口語歌集「石狩平原」を出版。1935(昭10)年、第一童謡集『ランプと仔馬』(穂曾谷秀雄と共著)1936(昭11)年『納屋の子供等』を刊

行。これらはまさに石狩平原のど真ん中にある新篠津村の農村生活とそこに生きる子供たちを詠んだものとして、「赤い鳥」童謡とは一線を画す土の匂いと子供たちの生命力にあふれた優れた作品群である。

夜露

深い霧だな／おどっちゃん／ほし草いれないで／いいかなあ／／深い霧だな／おどっちゃん／牧場がけむって見えないぞ／こっ子牛いれないで／いいかなあ／／

猫なげ

こっ子猫投げた／あんちゃんといった／石狩川んふちで／あんちゃんが投げた／／あんちゃんも走った／おんらも走った／／田圃道こえて／あとも見ずに走って／家ん前まで走った／こっ子猫ごめんよ／ばけなくておくれ／／

戦後、坪松は一時森高等女学校に勤めるが、1948(昭23)年江別第三中学校に転任、この頃江別第二中学校、篠津小学校をはじめ近隣の小・中学校の校歌を多く手がける。

その他、坪松一郎の名を忘れても、今も北海道で歌われているのが子ども盆踊り歌である。

そよそよ風 牧場の街に／吹けばチラチラ灯がともる／赤くほんのり灯がともる／ホラ灯がともる／／シャンコシャンコシャンコ／シャシャンがシャン／手拍子そろえて シャシャンがシャン／／以下略

8. 支部沈黙

8-1 「秀才文壇」を読む

支部沈黙(本名貞助 1892(明25)－1969(昭44))は宮城県志田郡松山村に生まれ、松山高等小学校卒業後、先に渡道した父、兄を追って一家で渡道、音江村内大部(現深川市)で暮らす。1910(明43)年、札幌師範学校に入学するが肋膜炎のため退学。1913(大2)年厚田小学校で教員になる。

彼の文学への動機は音江村で手にした「秀才文壇」(文光道)であった。「秀才文壇」は1901(明34)年10月創刊、1923(大12)年8月、関東大震災で廃刊となったが、編集担当に小川未来や前田夕暮らが名を連ねる投稿雑誌であった。支部はこの雑誌を暗誦するほどに読み親しんだという。

8-2 三木露風との出会い

沈黙は厚田時代に詩と随筆の同人誌「ささやき」を謄写版刷りで出していた。その後、友人辻義一に誘われ詩誌「路上」の同人となる。その後「路上」は18号を出して終刊。短歌と詩の専門誌「アカシア」が安達市之丞が編集担当となり、1922(大11)年10月創刊号を出す記念事業として9月27日講演会を開いた。講師は当時トラピスト修道院にいた三木露風である。当時の「北海タイムス」によれば「入場者凡そ450名」とある。沈黙は露風の「蘆間の幻影」を読んで、絶賛の一文を送る程傾倒し、露風の近くに住むことを懇望する。露風はその時の約束を忠実に果してくれたため、支部は上磯町となりの茂辺地小学校の教員となる。

沈黙は翌年(大12年)8月15日に妻子を連れて転任した。

以後、露風がトラピストを去るまでの一年弱、沈黙は休みの度に露風を訪れ交流を深めた。

露風は1923(大12)年10月、関東大震災の見舞いのため上京し、11月に修道院に戻ったがそのショックでノイローゼになる。露風の惑乱が一番ひどかったとき、沈黙が露風の担当する詩の代選を行ったことが、随筆「修道院のあとさき」に書かれている²⁰⁾。

露風がトラピストを去った後、沈黙も又翌年の1925(大14)年、旭川大成小学校へと転任した。露風との交流はその後も続き、露風の死は1964(昭39)年12月、手紙を出しに行く途中の交通事故だったが、その手紙の宛先は支部沈黙だったという。

8-3 北海道初の童謡集『ありのお城』

支部沈黙は1928(昭3)年5月1日、札幌市の国語夜話会から北海道初の童謡集『ありのお城』を出す。当時沈黙は旭川大成小学校に勤務し、三女の父でもあった。『ありのお城』に収録された18編の童謡は「路上」や「アカシア」「児童文芸」²¹⁾「小学キング」²²⁾に掲載したものを推敲し載せたものである。A六判、32頁で定価5銭、「道内に1万冊ほどばらまいて、当時の子どもさんたちに読んでもらった豆本です」と後に本人が語っているが、1918(大7)年「赤い鳥」が創刊されてわずか10年程で、沈黙が小学校教員であり、教育関係者の手を通してばらまかれたとしても驚異的な数字である。

沈黙の代表作は次の「豆」であろう。

豆

ばらばらばらと／豆落し、／莢が弾けて／豆が
とぶ、／空をめがけて／とんだ豆。／晩になつたら
／星になれ。／／

これは1923(大12)年2月の「アカシア」第4集に載ったものを推敲したものである。

蟻の行列

蟻の行列 つづいている／ばんかた／うらの葱
畠／／なかまはづれの／蟻ひとつ／葱のあた
まにのぼりつめ／／お寺のかねでも／きいている
か／蟻の行列／つづいてる。

3人の子の親として、又小学校教師として子どもと日々接していた沈黙が、この時期、童謡を作ろうとしたのは自然に見える。しかし、その後、1930(昭5)年詩集『路草』(札幌市 富貴堂)、1935(昭10)年に詩文集『空と山の線』(札幌市 富貴堂)と詩の方へと傾斜して行ったのは詩人の必然でもあったのだろう。それは『ありのお城』の余白に下記のような短詩を組み込んでいたことにも表れているように思われる。

- ・かれくさもよし／ねころべば／空の日の暈／わが心にかえる
- ・空をみると／水をまいたやうだ／空がうごいて／ひろいひろい心となる／あゝあんなことは言はずもいゝ

9. 木村不二男

9-1 木村不二男の童謡集

木村不二男(1906(明39)–1976(昭51))は秋田県で生まれる、小学校6年生の時、父文助と渡道。函館師範学校、東京の文化学院をへて、玉川大学教育学部卒業後、北海道亀田郡石崎小学校教諭となる。この頃から「赤い鳥」に童謡を投稿、1928(昭3)年、7編の童謡が入選した。1930(昭5)年上京し、鈴木三重吉に師事する。同年3月に創刊された童謡同人誌「チチノキ」(乳樹社)の同人となり、与田準一らと親交を結ぶ。「チチノキ」は童謡の芸術性を重視した結晶度の高い雑誌として、昭和初期を代表する雑誌である。

1945(昭20)年、東京空襲のため渡島管内森町に疎開、森町高校教諭となる。1958(昭33)年童謡集『ニシパの祭』(山音文学会)を出版。ここには「赤い鳥」時代、「童謡詩人」時代、「チチノキ」

時代の童謡が納められている。又、この頃、片平庸人と函館で出会っており、その奇矯なふるまいに驚いたことが書かれている。1967(昭42)年5月～1972(昭47)年11月まで「童話」(日本童話会)に評伝「鈴木三重吉」を57回に渡って連載した。

9-2 木村不二男の「アイヌの子」

アイヌの子

笹の窓から、顔が出る／／^{おの}月さま、^{おの}月さま、／おと
おりなされ。／／マキリこつこつ、／お^{ほりもの}彫物
入^{いれずみ}墨青い／お母さま。／／子熊今夜は、／腹痛
い、／檻でしくしく泣いてるよ。／／^{おの}月さま、
^{おの}月さま／おとおりなされ。／／窓から子どもが、
呼んでいる／／

(「赤い鳥」昭6年6月)

これはその後与田準一選の『日本童謡集』に収録されたものである。

北原白秋の「アイヌの子」と比べて、アイヌの人たちの暮らしが優しい歌の中でそっと語られている。「お母さま」などことばは都会風のことばだが、その歌われた風景はそのままアイヌ部落の風景である。

さむい夢

雪の白い から松山が／どこまでも 北に走
つて／／日向でよ オロチヨンの子は／あそんで
いたよ 丸木小屋のそば／／^{とよどり}豊泊 さびしい
村よ／さむざむと 広い道だけ／／転校した
あの子を見たよ／先生と 声をかけたよ／／樺
太も 春がきていた／ゆうべ見た さむい夢で
は／／

(昭3、5)

当時、木村の赴任した小学校は、函館半島の西側のうらびれた漁村であった。冬になると、男はカムチャッカ、女は北千島へ出稼ぎに出る貧しい村であった。教師をしていた木村が見る樺太の夢は、やはり寒々とした貧しい夢であっても、夢の中ではわずかに樺太に春が来ていたことは救いである。

10. 片平庸人と童謡集『ほうほう春』

片平庸人(1902(明35)年7月～1954(昭29)年12月)は仙台市で生まれる。仙台時代「おてんとさん童話会」で鈴木碧らとともに口演童話等の

活動をしたが、1930（昭5）年、姐の嫁ぎ先の函館に移住。西条八十に私淑し「童話」に童謡が多数載る。1934（昭9）年12月、『ほうほう・はる』を函館のすかんぼ童謡社から出す。増補改訂版が翌年、1935（昭10）年5月、土に描く社から出版。又、遺稿集『青いツララ』（片平イト）が1978年9月に出ている。『北海道児童文学全集』第13巻「詩と童謡」には、片平の作品は、「赤い鳥」（昭6年3月）に載った「河洲」の他、「山背泊^{やませどまり}」「青いツララ」が載っている。

11. 渡辺ひろし

渡辺ひろし（1912（明45）年2月～1991（平3）年12月）は東京で生まれる。本名は弘。東京目白中学校中退、1928（昭3）年から「コドモノクニ」に童謡を投稿。1930（昭5）年、巽聖歌の紹介で「チチノキ」の誌友となる。復刊後の「赤い鳥」に投稿、8編が入選する。1950（昭25）年札幌に移住、（株）ロバパンに勤務のかたわら、同人誌「森の仲間」の創刊（1961（昭36）年4月）に参加、1962（昭37）年10月、童謡詩集『にじのつらら—渡辺ひろし作品集1』（札幌・Rスタジオ）を出す。「ミズバショウ」（「森の仲間」第16号 昭和49年11月）は、小学六年国語教科書（日本書籍 1977年）に収録された。

「てろん とろっぷ—つららのうた—」は1959（昭34）年北海道児童文学作品集「原っぱ」に載せた作品で、「てろん とろっぷ／つらがひかる」「てろん とろっぷ／つらがうたう」というつららからしづくの音が、すぐれたオノマトペで表現されている。昭和32年「日本児童文学」7月号に載った「ろばよ 走れ」は、「めんこい ろばよ／とことこ 走れ」「北一条の なみ木／アカシアの下を／時計台の かねが／鳴ってる 道を」と歌われ、勤務先のロバパンへの愛着と札幌の町への賛歌が、ろばのやさしい歩みのように快く歌われている。又、童謡集『ろばよ走れ』（もくば社）が1978（昭53）年11月に刊行された。

渡辺ひろしの集大成として『渡辺ひろし詩集 だんしゃくいもの歌』『渡辺ひろし童謡集 てろんとろっぷ』が1983（昭58）年6月、藤倉英幸・絵で、らいらっく書房より2冊組み『渡辺ひろし作品集』として刊行された。

12. 大久保テイ子

大久保テイ子（1930（昭5）2～2002（平14）4）は紋別市生まれ、旧制女学校卒。北海道詩人協会会員。1975年詩人協会賞受賞北海道児童文学の会会員として同人誌「原野の風」に童謡・児童詩を多く発表した。童謡・詩集『コロボックル』には48編の童謡が載っている。その一編「月夜のシャベル」は、1977（昭52）年「札幌市お母さんの書いた童謡」の入選作である。

月夜のシャベル

月夜のはたけに シャベルがひとつ／巨人がわすれた シャベルがひとつ／／ほんとはきよわな 巨人のおとこ／やみよにこっそり あらわれいでて／キャベツばたけの キャベツをひとつ／／（以下略）

この歌は後に『月夜のシャベル』（らくだ出版 1986年）として出版された。

その後詩集『はたけの詩』（教育出版センター 1986年）、詩集『ほっこてぶくろ』（岩崎書店 1990年）が出ている。

13. 名取和彦

名取和彦（1937（昭12）年8月～現在）は小樽市生まれ、実家は老舗の金物店であった。本名は一彦。慶應義塾大学入学後、サトウ・ハチローの主宰する「木曜会」に入会、この会でサトウ・ハチローや藤田圭雄の批評を受けたという。卒業後小樽に戻り、実家を継ぐ。1973（昭48）年9月、木曜会出版部から初めての童謡集『コロボックルのセレナーデ』を出す。これには恩師サトウ・ハチローの序文があり「名取和彦の詩には北海道の色がある 北海道の匂いがある」と、彼が郷土を歌う詩人であることが書かれている。次の「熊さん これから冬ごもり」にも、長い冬を迎える北国の哀愁が感じられる。

熊さん これから冬ごもり

熊さん ぐると見えています／おやはすっかり枯葉いろ／雪も一度はふりました／／（中略）お日さま見つめて 雲を見て／林の匂いをまたかいで／もいちど風をきいてみて／／みんなに「おやすみ」つぶやいて／熊さん ちょっぴりさびしそう／それではこれから冬ごもり／／

これは、若松正司・作曲、真理ヨシコ・歌でNHK

「こどものうた」で歌われた。

以上、紙数を大幅に越えているので後半は急ぎ足の紹介になってしまったが、まだ2～3取りあげそこねた詩人もいる。又、童謡に限定したために「子どものための詩」や少年詩集などは取り上げきれなかった。『北海道児童文学全集』第13巻(加藤多一解説)「詩と童謡」にはまだ多くの童謡や詩が載っている。興味のある方はこれも参考にして頂きたい。

注

- 1) 北原白秋「日本童謡ものがたり」河出書房新社2003年。
底本は「日本童謡物語」(「日本児童文庫」12アルス1955年)。
- 2) 上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版2005年。
- 3) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書1993年。
「童謡」欄 藤田圭雄。
- 4) 鈴木三重吉主幹児童雑誌「赤い鳥」は1921(大7)年7月創刊され、そのモットーは「世俗的な下卑た子供の読み物を排除して、子供の純正を保全開発するため」と称され、1929(昭4)年2月～1931年1月の休刊をはきみ、1936(昭11)年8月廃刊まで196冊が刊行された。
- 5) 北原白秋「赤い鳥」大正7年10月。
赤い鳥、小鳥、／なぜなぜ赤い、／赤い実食べた。
白い鳥、小鳥、／なぜなぜ白い、／白い実食べた。
青い鳥、小鳥、／なぜなぜ青い、／青い実食べた。
- 6) 北海道河西郡の子守歌「ねんねの寝た間に」「赤い鳥」大正7年7月創刊号。
ねんねの寝た間に何しよいの、／あづき餅の、栃餅や。
赤い山へ持って行けば、／赤い鳥がつつく。
青い山へ持って行けば、／青い鳥がつつく。
白い山へ持って行けば、／白い鳥がつつく。
- 7) 北原白秋「童謡私観」(「詩と音楽」大正12年、1月号)。
- 8) 北原白秋『フレップ・トリップ』岩波文庫2007年 初出誌『女性』1925年12月-27年3月プラトン社刊 フレップ、トリップとも赤と黒の木の実の名。
- 9) 和田典子『三木露風赤とんぼの情景』神戸新聞総合出版センター1999年p.128。
- 10) 注9, p.108-p.111「赤蜻蛉」の成立事情。
- 11) 注9, p.116～p.119。
- 12) 比良倍治「三木露風とトラピスト修道院——童

謡「赤とんぼ」誕生をめぐって——」北海道子どもの文化研究同人誌「ヘカッチ」3号1997年p.27。

- 13) 「金の船」「金の星」1919(大正8)年11月刊行。発行者横山寿篤、編集人齊藤佐次郎で出版したが、1922(大正11)年、齊藤佐次郎が独立、6月号から書名を「金の星」と改め、1929(昭和4)7月まで全116冊が出ている。
- 14) 畑中圭一『童謡論の系譜』東京書籍1990年。
- 15) 菊池寛『赤い靴はいてた女の子』現代評論社1979年。
- 16) 吉田美和子『桃花村まで——吉田一穂の詩と世界』(三月舎1990年)。
- 17) 与田準一『日本童謡集』(岩波文庫1957年)。
- 18) 新館長持「伊東音次郎の周辺」上「江別文学」6号1972年12月。
- 19) 望月芳明『人間の詩』叢書「江別に生まれる5」江別市教育委員会p.57～p.58。
- 20) 支部沈黙「修道院のあとさき」『支部沈黙作品集』下 北書房1967年p.13～p.17。
- 21) 「児童文芸」1924(大正13)年10月創刊。
- 22) 「小学キング」1925(昭和1)年3月創刊。

参考資料

- 『日本児童文学大系』17 三木露風・野口雨情・サトウハチロー ほるぷ出版1978年。
『日本児童文学大系』7 北原白秋 ほるぷ出版1977年。
『日本童謡事典』上笙一郎 東京出版2005年
「ヘカッチ」1号 北海道子どもの文化研究同人誌1994年5月 柴村紀代「黎明期の作家たち」その1 吉田一穂。
「ヘカッチ」2号 北海道子どもの文化研究同人誌1995年10月 柴村紀代「北海道の童謡詩人たち」(1)支部沈黙の童謡について。
「ヘカッチ」3号 北海道子どもの文化研究同人誌1997年7月 柴村紀代「北海道の童謡詩人たち」(2)伊東音次郎の童謡について。
「ヘカッチ」4号 北海道子どもの文化研究同人誌1999年11月 柴村紀代「北海道の童謡詩人たち」(3)名取和彦著『コロボックルのセレナーデ』。
『歌の中の札幌』さっぽろ文庫81 札幌市・札幌市教育委員会1997年 柴村紀代「北海道の童謡の播籃期」。
『北海道の児童文学』にれの樹の会編 北海道新聞社1977年。
「北海道児童文学全集」第13巻 立風書房1984年。
『日本児童文学大事典』大阪国際児童文学館編1993年。

北海道童謡年表 (文章末の数字は「月」を表わす)

明治 1	1868		大正 1	1912	
明治 2	1869		大正 2	1913	
明治 3	1870		大正 3	1914	
明治 4	1871		大正 4	1915	
明治 5	1872		大正 5	1916	
明治 6	1873		大正 6	1917	
明治 7	1874		大正 7	1918	児童雑誌「赤い鳥」創刊 7
明治 8	1875		大正 8	1919	童謡集『とんぼの眼玉』 10
明治 9	1876		大正 9	1920	
明治 10	1877		大正 10	1921	童謡集『真珠島』 10
明治 11	1878				童謡集『十五夜お月さん』 6
明治 12	1879		大正 11	1922	
明治 13	1880		大正 12	1923	
明治 14	1881		大正 13	1924	童謡集『青い眼の人形』 6
明治 15	1882	野口雨情生誕 5	大正 14	1925	
明治 16	1883		大正 15	1926	童謡集『お月さま』 9
明治 17	1884		昭和 1	1926	
明治 18	1885	北原白秋生誕 1	昭和 2	1927	
明治 19	1886		昭和 3	1928	童謡集『ありのお城』 5
明治 20	1887				『フレップ・フリップ』 2
明治 21	1888		昭和 4	1929	
明治 22	1889	三木露風生誕 6	昭和 5	1930	童謡同人誌「チチノキ」創刊 3
明治 23	1890				大久保テイ子生誕 2
明治 24	1891		昭和 6	1931	
明治 25	1892	支部沈黙生誕 5	昭和 7	1932	
明治 26	1893		昭和 8	1933	
明治 27	1894	伊東音次郎生誕 5	昭和 9	1934	童謡集『ほうほうはる』 12
明治 28	1895				童謡集『ランプと仔馬』 1
明治 29	1896		昭和 10	1935	
明治 30	1897		昭和 11	1936	童謡詩集『納屋の子供等』
明治 31	1898	吉田一穂生誕 8	昭和 12	1937	名取和彦生誕 8
明治 32	1899		昭和 13	1938	
明治 33	1900		昭和 14	1939	
明治 34	1901		昭和 15	1940	
明治 35	1902	片平庸人生誕 7	昭和 16	1941	
明治 36	1903		昭和 17	1942	
明治 37	1904		昭和 18	1943	童謡集『朝おき雀』
明治 38	1905		昭和 19	1944	
明治 39	1906	木村不二男生誕 3	昭和 20	1945	
明治 40	1907		昭和 21	1946	
明治 41	1908		昭和 22	1947	
明治 42	1909		昭和 23	1948	
明治 43	1910	坪松一郎生誕 5	昭和 24	1949	
明治 44	1911		昭和 25	1950	
明治 45	1912	渡辺ひろし生誕 2	昭和 26	1951	
			昭和 27	1952	
			昭和 28	1953	
			昭和 29	1954	
			昭和 30	1955	
			昭和 31	1956	童謡集『鳩の扇子』 8
			昭和 32	1957	
			昭和 33	1958	童謡集『ニシパの祭』 8
			昭和 37	1962	童謡集『にじのつらら』 10
			昭和 48	1973	童謡集『コロボックルのセレナーデ』 9
			昭和 53	1978	童謡集『ろばよ走れ』 11
			昭和 58	1983	『渡辺ひろし童謡集 てろんとろっぶ』 6
			昭和 61	1986	童謡集『月夜のシャベル』 1